ニーチェの生成論

岩見隆宏

第一節　権力への意志

本稿では、「権力への意志」の解釈を踏まえ、ニーチェの生成論を展開する。ニーチェは芸術論を前提とした生成概念を論じることにより形而上学的な価値定立を批判している。しかし、生成が全ての価値定立を退けるのではなく、形而下における価値定立に一定の価値を見出していることを論証する。そこで、生成のみならず存在に着目する。存在は形而上学と仮象という二つの側面をもち、ニーチェは仮象としての存在の必要性を論じている。さらに生成を取り上げることにより、生成―仮象としての存在という二項対立図式が克服され、生成自体に存在の要素を見出し、生成と存在の不可分性を明らかにする。

権力への意志という概念は後期ニーチェの主要概念の一つであり、ニーチェ思想を構成する最も根源的な概念であることは疑い得ないため、この概念について論じることによって、ニーチェ哲学の幹となる生のダイナミズムと存在を橋渡しすることができる。

では権力への意志とはどのようなものか。ニーチェはこの世界における唯一の力動源として権力への意志を位置づけている。このような権力とは欲情に他ならない。ニーチェは以下のように述べる。

> 生理学者たちは、自己保存の衝動ある有機体の基本的衝動（kardinalen Trieb）として立てることを、考え直すべきであろう。何らかの生物は何よりもまずその力（Kraft）を放出しようとするのであり―生（leben）そのものが権力への意志（Wille zur Macht）である―自己保存（Selbsterhaltung）はこのことの間接の、もっとも頻繁に生じる結果であるにすぎない。[1]

生物の根源的な欲動として自己保存を位置づける生理学者を批判し、権力の放出を生物の根底に据えている。自己保存とは、権力の放出によって頻繁に発生する結果に過ぎない。ニーチェはこの世界を権力への意志である欲望や衝動に還元しようと試みた。

このように権力について論じることにより、ニーチェがキリスト教を批判していることは明らかであろう。キリスト教は人間にとって根源的である欲望や衝動に目を背け、否定することによって、彼岸の価値を定立し、それらを実在性として位置づける。しかし、世界の根底には権力への意志があり、現実に起こる事象は権力への意志の作用の結果に過ぎない。ニーチェはキリスト教の神に代わり、この世界全体の原理として権力への意志の哲学を展開したのである。

次に、権力への意志の内実について論じる。端的に述べると、権力への意志とは多数の諸力の闘争から成り立っている一つの複合体である。ニーチェは「大小の闘争はいたるところにおいて、優越をめぐって、成

長と拡大をめぐって、力をめぐって闘われるのである、―権力への意志に従って―。権力への意志こそ生の意志なのだから」[2]と述べ、大小様々な権力が競いあっている状態こそが生であり権力への意志なのである。力には、他の力を圧倒することができるものとこれらの力に服従するものが存在する。権力への意志における力の闘争に関し、ニーチェは以下のように述べる。

> 生そのものは本質的に他者や弱者を我がものにすること、傷つけること、制圧することであり、抑圧であり、冷酷であり、自己の形式を押しつけること、他を併合することであり、少なくとも―もっとおだやかに言っても、搾取（Ausbeutung）である。（中略）それは生長し、広がり、独占し、優勢を占めようと欲するだろう、―それらも何らかの道徳性や不道徳性からではなく、それが生きているから、生がまさに権力への意志であるから、そうするのである。[3]

ここでは、権力への意志の定義が端的に示されている。権力への意志は優勢を占めようと生長し、拡大するような諸力の闘争の状態なのである。それは道徳によって説明されるべきものではない。生とは他者の征服つまり搾取であり、この搾取を基盤として生は成り立つのである。さらに、権力への意志による闘争は生そのものの生長に通じている。言うなれば、権力への意志の増大は生長にほかならない。ニーチェは権力への意志の生長に関し、以下のように述べる。

> 生とは、さまざまな闘争者がその中で不均一に成長する諸力を確認する過程をあらわす一つの持続的形式と定義できよう。服従の中にも抵抗が存在し、自己の力が決して放棄されることがないように、命令の中にも許容が存在し、その結果敵の絶対的な力（absolute Macht）は、打ちまかされることも、同化されることも、解消されることもないのだ。「服従」と「命令」とは競技の形式である。[4]

先に述べたように、生とは権力への意志である。それは、生長を志向する力が闘争し合う状態であると言い換えることができる。生長は命令と服従から成り立ち、他の力を自らに取り入れることによって自己の範囲を拡大することである。

上述の通り、権力への意志について論じてきた。権力への意志は大小様々な諸衝動が闘争し合い、他の力を征服し搾取することによって、自己を拡大しつつ、その自己をも乗り越えることによって、さらなる生長を目指すものである。

次に、芸術の観点から権力への意志を考察し、特にディオニュソス的なものとアポロ的なものの二つの側面に焦点を当て、芸術が権力への意志を生長させることを明らかにする。

芸術は権力への意志の上昇に不可欠な要素であり、ニーチェは頻繁に芸術と権力への意志の関係について論じている。ニーチェにとって、芸術における美と陶酔の感情は権力への意志の上昇にほかならない。

> 美しいもの（Schöne）は、役にたつもの、ためになるもの、生を高めるという生物学的諸価値の一般的範疇のなかにある。とは言えそれは、役にたつ事物や状態をはるか遠くから想起させ、それらへの注意を促すところのたくさんの刺激が、われわれに美しいものという感情を、言いかえれば権力の感情（Machtgefühl）が増大しているという感情を与えるという意味である。[5]

ニーチェが言う生物の根源的な価値とは、生にとって有用、有益であり、生を上昇させるという基準によって測られるものである。芸術と権力への意志は密接に関係し、芸術における美の作用によって権力への意志は上昇する。

つぎに、芸術論におけるディオニュソス的、アポロ的という主要概念を取り上げる。ニーチェは以下のように述べる。

アポロ的（Apollinisch）、ディオニュソス的（Dionzsisch）　芸術そのものが自然力のように人間の中にあらわれ、人間が欲しようが欲しまいが、これを自由に駆使してしまう二つの状態がある。一つは幻影への強制としてであり、もう一つは狂乱（Orgiasmus）への強制としてである。この両状態は通常の生活の中でも、その程度は弱いけれども、夢となり陶酔（Rausch）となって――――におけるようにしかし同一の対立が夢と陶酔とのあいだにも存在する。両者はわれわれの中で芸術的［自然］力を解放する、とはいえそれぞれ別な具合に。夢は観る、結びつける、創るといった［自然］力を、陶酔は身ぶり、情熱、歌、舞踏といった［自然］力を解放する。[6]

芸術の効果としてアポロ的なものとディオニュソス的なものとが対立して論じられている。アポロ的なものは「幻影への強制」と形容され、観想や連結、詩作の働きであり、夢として描かれている。一方で、ディオニュソス的なものは、「狂躁への強制」であり、激情や歌唱、舞踏にみられる陶酔である。ここでは、陶酔に対応するディオニュソス的なものが芸術の根底に位置づけられていること明らかになった。まずはアポロ的なものの解釈に触れておく。ニーチェは以下のように述べている。

アポロ的（Apollinisch）という言葉で表わされているのは、完全な対自存在への、範型的な「個体」への、簡単化し、ぬきんじさせ、強く、明確に、曖昧でなく、範型的にするものへと向かう衝迫であり、すなわち法則のもとでの自由である。[7]

アポロ的なものの作用とは生成流転する世界を形態化することにある。本来、人間にとって捉え難い複雑なカオスの世界に対し、区分を設け、明確に分離し、単純化するのがアポロ的なものの作用である。また、それは芸術によって世界と合一した自己を切り離す作用でもある。

続けてディオニュソス的なもの解釈について論じる。ディオニュソス的な神は破壊や懐敗、否定などを贅沢なものとして受け入れることができるとニーチェは言う。ディオニュソス的なものは、陶酔における力の過剰並びに浪費を象徴している。では力が充溢し、それが浪費される状態とはいかなる状態か。ニーチェは力の充溢によって生が肯定される状態について、以下のように説明している。

「ディオニュソス的」という言葉であらわされているのは、統一への衝動、個人、日常、社会、現実性を超えたものへの把握であり、忘却の深淵として、より暗い、より満ちた、漂うごとき状態へのうちへの情熱的・病苦的な溢出である。すべての変転における等しきもの、等しく強力なもの、等しく至福なるものとしての、生の全体的性格への歓喜溢れる肯定である。[8]

ディオニュソス的なものとは、暗く豊満な流動する世界に内在することである。ここで注目すべきは、生成のみならず分断化された世界に価値を見いだしている点にある。ニーチェは生成流転する世界を前提とし

つつも、変わることのない等しきものを見出し、それらのものを生の全体として捉えている。言い換えると、自己と世界という境界が存在する以前のカオスの状態のみならず、形態化する作用にも価値を見出しているのである。ディオニュソス的なものとはアポロ的な形態化の作用を含み、それを肯定するという高次の段階に位置づけられていると言えよう。ニーチェはさらに、以下のように述べている。

> まさしく結局のところなぜギリシア的アポロ主義がディオニュソス的基底から生ぜざるをえなかったのかを推測するために努力したのであった。ディオニュソス的ギリシア人がアポロ的となることを必要としたということ、すなわち、その巨大なもの、複雑なもの、不確かなもの、驚愕すべきものを、節度への、単純への、規制と概念の秩序づけへの意志によって打ち破ることを必要としたということである。[9]

破壊や生成流転を象徴するディオニュソス的なものは、単純化や形態化というアポロ的なものを必要とする。ここでは、ディオニュソスとアポロという二項対立ではなく、アポロ的なものを含んだ、より高次のディオニュソス的なものの作用が強調されていることに気づかされる。ディオニュソスがアポロを必要とするからこそ、それを包含した高次の段階にディオニュソスは昇華できるのである。

上述の通り、芸術の観点から権力への意志について論じてきた。特にディオニュソス的なものとアポロ的なものの二つに焦点を当て、芸術が権力への意志を生長させることが明らかになった。

次に認識としての権力への意志を取りあげるにあたり、まず権力への意志の作用である解釈について、権力への意志との関係に着目しながら論じていく。ニーチェが提唱する認識とは解釈にほかならない。ニーチェは従来の哲学において論じられてきた認識という概念に対し解釈という概念を提示することにより、その重要性を説いている。

このような解釈は権力への意志の作用である。以下に提示するアフォリズムにおいては、権力への意志と解釈の関係が概観されている。

> 権力への意志（Wille zur Macht）は解釈する（interpretirt）。なんらかの器官が形成されるときには解釈がある。権力への意志は他との違いを定め、程度の差を、権力の差（Machtverschiedenheiten）を規定する。単に力の差異が存在しているだけでは、力の差として感じられることはない。そのためにはみずから増大しようとするなにものかが存在し、それが、同じく増大しようとしている他のどんなものについても、解釈によってその価値を見定めようとするようにならなければならない。その点で同じなのは――真実のところ解釈とはあるものを支配するための手段そのものである。（有機体の生命過程はたえざる解釈を前提としている。）[10]

ここでは権力への意志の作用として解釈が位置づけられていることが明らかになった。権力への意志の諸力は他の諸力を征服するために、解釈を行い、そのような解釈の強さは権力の度合いと比例する。大小様々な権力が闘争することによって、解釈という手段を用い、目的や意味を見いだし、権力に比例するかたちで、解釈が行われ、世界が構築される。このような解釈は遠近法を基盤としている。ニーチェは遠近法に関し、以下のように述べる。

『認識』（Erkenntiß）という言葉にある意味がある程度に応じて、世

界は認識しうるものとなる。だが世界は他にも解釈しうるのだ。世界は背後にひとつの意味を携えているのではなく、無数の意味をしたがえているのだ。『遠近法主義（Perspektivismus）。』[11]

認識によって構築されている事実なるものは、本来ならば我々の解釈に過ぎず、そのために多様な解釈を含むものである。それらの解釈は遠近法主義を前提とし、われわれの欲求に対応している。ニーチェは解釈に対する外から与えられた価値観を斥け、それらの多様性を肯定している。解釈が多様であるのは、解釈主体である権力自体が一つの闘争状態として、つまり大小様々な権力から成り立っているからである。

ニーチェによると我々にとって世界は客観的に実在するものではなく、それは遠近法主義に支えられた無数の解釈の束によって成り立つものである。言い換えると、我々の権力の度合いによって、世界を構築される。さらに、遠近法を前提とする解釈は権力への意志に奉仕するものである。権力と遠近法に関し、ニーチェは以下のように述べる。

遠近法主義の領野および誤謬はいかにして成立するのだろうか？それは、なんらかの生命体が存在することによって、その生命体がではなく、闘争こそが自己を維持し、増大させ、自己に関する意識を保ち続けようとしているからである。[12]

権力が自己自身を保存し、生長させることを目指しているからこそ、それらは闘争状態にあり、遠近法主義が成り立つ。言い換えると、遠近法主義は権力の保存と生長を前提とするのである。さらに、遠近法主義を前提とする解釈は権力の生長を支える役割を担っている。ニーチェにとっては、解釈に付与された価値が重要なのではなく、それらがいかに生を促進や保存をするかが重要なのである。

このように、解釈の作用について論じてきた。解釈とは権力への意志の闘争を基盤とし、遠近法に通底されている。解釈は多様な権力への意志の作用であり、また力の生長を支えるものであることが確認された。このことにより、解釈は遠近法主義を内に孕んでいるために、形而上学的な価値定立を批判することができるのみならず、解釈それ自体も固定化されずに更新され続けるものである。

第二節　生成

生成（Werden）の解釈を論じるにあたり、まずニーチェが生成を提唱した問題意識に触れておく。従来の西洋哲学において真の世界は形而上学的な世界であり、そのため生成流転するのではなく、恒常普遍のものである。しかし、このような世界は誤謬である。ニーチェは背後世界を構築してしまわざるをえないことをニヒリズムの根本原因として捉えている。

ニーチェはニヒリズムに関し、「逃げ道として残っているのは、この生成の世界全体を迷妄（Täuschung）と判決を下し、生成の世界の彼岸にある世界を真の世界（wahre Welt）としてでっちあげることである」[13]と述べ、意味や目的を付与することができないと認識すると、唯一現実の生成の世界ではなく、生成の世界とは別の世界を虚構することをニヒリズムの原因として位置づけている。さらにニーチェは以下のように述べる。

ニヒリズムは形而上学的世界への不信を内に含み、―真の世界への信仰を自らに禁じている。このような立場では、生成の現実を唯一の現実と認めるしかなく、背後世界や偽の神格に通じるあらゆる類

の抜け道を禁じることになる—しかしもはや否認しようとは思わぬ
この世界に耐えられないのだ[14]

ニヒリズムとは、形而上学を批判し、真の世界の虚構性を自覚し、それへの信仰を断念することでなる。背後世界が批判され、それは人間にとって耐え難いものであるからこそ、否認されてきた生成の世界を唯一の実在性として受け止めなくてはならない。言い換えると、背後世界への信仰こそがニヒリズムなのであり、本来的に意味や目的、価値がない生成の世界を生き抜かなければならない。

では、耐え難い生成の世界とはどのような世界か。生成の世界の概念的特色について論じていく。

生成の特色として、「この世界の実在性を作り出している諸特質、変化（Wechsel）、生成（Werden）、多様（Vielheit）、対立（Gegensatz）、矛盾（Widerspruch）、闘争（Krieg）のゆえにである」[15]と述べられている。ここでは、生成に含まれる要素として、変化、多様、対立、矛盾、闘争などが挙げられていることがわかる。以下では、論の関係上、まず多様を取り上げ、次に対立、矛盾、闘争、最後に変化の順に、生成の概念的特色について論じていく。

まず多様について論じる。これは「多数性」と言い換えることができる。「『単一性』（Einheit）は生成の本性のなかにはまったく存在していない」[16]と述べているように、生成は単一ではなく、多数のものから成り立っている状態である。さらに、その数は変化しているのである。

では何が生成を支えるのか。それは力である。力が入り混じり、それらが対立し闘争しつつも、その状態によってこそ成り立つものである。ニーチェが「あらゆる事件生起、あらゆる運動、あらゆる生成を度合いや力の諸関係（Kraftverhältnissen）を確認することであり、一つの戦い（Kampf）である」[17]と述べているように、生成は複数の諸力の闘争として描かれている。これまでに論じたように権力への意志を構成する力は生成概念にも通底している。この力の闘争にこそ、上述した対立、矛盾、戦闘という特色が見受けられる。大小様々から成る力が変化し、闘争している状態を生成の状態として捉えることができる。さらにこの状態は持続するのではなく、常に変化し続けるものである。

最後に変化について取り上げる。変化とは、生々流転や流動に言い換えることができる。この点において、背後世界における変わることのない恒常普遍の価値と相対することは言うまでもないだろう。さらにニーチェは「世界はある持続した状態（Dauerzustand）をめざすものではないということが、証明されている唯一のことである」[18]と述べている。ここでは世界が持続した状態でなく、生々流転している状態であることが強調されている。このように常に変化している世界においては、上述の通り、その変化に目標を見出すことはできない。

なぜなら生成は様々な力による闘争であり、その力の大小によって、変化し続けているという特色を持っているからである。常に変化し続けている生成の世界を、持続し、固定化して捉える作用は形而上学的な価値定立の萌芽となっている。

以上、これまでに論じた生成の特色を総括すると、大小様々な力が闘争し、それらが全体として変化し続けている状態であると言うことができる。そこで以下では、生成の概念的特色を浮かび上がらせるために、初期芸術論との連関のもとに生成について論じる。なぜなら、生成概念に初期芸術論におけるディオニュソス的なものと多くの共通点を見出すことができるからである。

生成とは初期芸術論におけるディオニュソス的なもの（die dionysischen）という力に対応している。ニーチェは生成の世界の特色として以下に述

べている。

ヘラクレイトスにおける流転と破壊の肯定は、ディオニュソス的哲学における決定的要素であって、対立と闘争とを然りと肯定し、『存在』という概念をさえも退けて憚らない生成―私はこの中にこそ、何をどうであろうとも、過去に思索された考えの中で私の考えに最も親縁性を持つものがあると認めないわけにはいかないのだ。[19]

このようにヘラクレイトスの思想に親和性を見出し、生成とディオニュソスとの共通点について述べている。さらにニーチェは「破壊への、変転への、生成への願望は、あり余る、未来を孕んだ力の表現でありえる（それに対する私の述語は、ご存知のように、「ディオニュソス的」という言葉）である」[20]と述べている。ディオニュソス的なものの要素である、陶酔、過剰、破壊といった要素が生成においても見受けられると言えよう。また、ここでは存在という概念が生成によって退けられていることが明らかになった。

しかし、ニーチェは「生成に存在の性格を刻印すること―これが権力への最高の意志の本質である」[21]と述べていることから、生成の優位性を認めつつも存在に対しても一定の価値を見出していると言える。言い換えると、ニーチェ哲学において、ディオニュソス的な生成概念のみならず、アポロ的な存在概念にも着目し、論じなければならない。そこで、形而上学に通じることのない存在概念、つまり生成に則した存在解釈を試みる。

第三節　存在

ニーチェは生成と存在（zein）を二項対立図式で捉え、此岸に立脚するのが生成であるのに対し、存在は彼岸の価値定立を前提とするものとして位置づけている。そこでまず、形而上学として批判されている存在概念について論じる。凝固し、恒常や不変など平衡状態に到達している世界とは存在の世界に他ならない。この存在の世界こそが形而上学に通じるのである。

人間は自分自身が投影した、存在する世界や形而上学的世界、「物自体」といった世界を信仰することによって自らの生存を保っている。存在する世界は形而上学的な世界と「物自体」の世界と並列に位置づけられている。それらの世界は確固たるものではなく、人間の信仰によってこそ成り立つものである。このように、ニーチェは総じて、形而上学としての存在の世界は神によって創られたのではなく、人間によって虚構され、信仰され、構築されていることを強調している。

虚構される世界とは、感官ではなく理性によって構築されるものである。物性や実体、持続という性質がこのような虚構化を支えている。しかし、本来は虚構であるはずの事物や理性が形而上学的な価値として定立されてしまう。

あらゆる最上の価値は一流のものであり、あらゆる最高概念、存在者、絶対者、善、真、完全など―こうした一切のものは別の何かから生じたものではあり得ない以上、「自己原因」であらざるを得ない。しかもこうしたいっさいのものは互いに不同ではあり得ないわけですし、互いに矛盾することもあり得ないのです。・・・こうして、哲学者たちは彼らの驚くべき概念「神」を持つに至るのであります。[22]

このように、虚構化された存在の世界においては、事物や実体、持続といった性質により形而上学との親近性が見受けられる。なぜなら、「存在するものは、生成しない、生成するものは、存在しない・・・そこで彼らすべては、絶望的にさえ、存在するものに信仰をよせる」[23]からである。ここで注目すべきは、存在つまり形而上学的な価値は信仰されるものであるとニーチェが述べている点にある。ニーチェは信仰という表現を用いることにより、形而上学的な価値に懐疑の眼差しを向けていると言えよう。

このように、虚構であるはずの世界が形而上学へと転化してしまう。それを支えるのが「神」という概念である。言い換えると、「神」によって、本来虚構である世界が形而上学的な確固たる世界として構築されるのである。存在と神との関係性について以下のように述べられている。

> 存在という世界が捏造されると、存在物にもろもろの価値が付与され、そうした価値にもとづき、生成変転する事物に対する断罪と不満が生じる。
>
> 存在者の転生（物体、神、理念、自然法則、定式、等々）[24]

本来、虚構であるはずの世界を形而上学的に支えるのが神であり、この概念と並列して、物体や理念、自然法則や定式といったものが、虚構された世界を形而上学的世界に転化させる。存在を措定する性質として、統一、同一性、持続、実体、原因、事物性、といったものは挙げている。そして、これらの諸要素は生成と対立していることは言うまでもない。変化し続ける生成の世界に対し、固定化を図るのが理性や認識の働きであり、それらは存在位相によって可能となるのである。

以上のように、存在の概念的特色について論じてきた。存在位相において、生成の世界を体系化や持続化を行うことにより、固定した世界として捉えることが可能となる。しかし、本来ならば虚構であるはずの世界が、固定化されることによって普遍的な性質を帯び、形而上学的な価値定立に転化してしまうのである。

ニーチェ哲学においては、生成と対立する概念として存在は提示され、形而上学批判の文脈で論じられることが多かった。確かに、ニーチェ哲学の根幹は「神は死んだ」という言葉に現れているように、これまでの哲学において主流であったイデアや神や、理性を批判することにあった。しかし、存在概念は全面的に批判されるべきものではない。以下では、形而上学に通じることのないような肯定されるべき存在概念について、存在位相の条件を中心に論じていく。ニーチェは存在位相の構築に関し、以下のように述べる。

> さまざまな概念、類、形式、目的、法則―すなわち「同一の事例から成る世界」―を形成せねばならないという欲求は、それでもってわれわれが真の世界を確立しうるかのよう理解されるべきではなく、われわれの生存が可能になるような世界をわれわれのために整えねばならないという切なる欲求として、理解されるべきである、―われわれはそれでもって、われわれにとって計算しうるとか、単純化されたとか、理解しやすいとかの性質をもつ、一つの世界をつくり上げるのだ。[25]

生成流転するカオスの世界に対し、「同一のもの」を見出すことによって、概念や類、形式などは論理化や合理化の作用として捉えられ、この過程を経て構築された世界は「同一の事例から成る世界」である。この世界はわれわれが認識可能で単純化された世界に他ならない。ニーチェ

によると、このような世界は「真の世界」として確立したものではなく、生存を可能にするものとして捉えられなければならない。言い換えると、ニーチェはこのような世界の必要性を説いているのである。われわれは存在位相においてはじめて生を維持することが可能になる。さらにニーチェは、以下のように述べる。

> 生は、持続するものや規則正しく回帰するものの存在を信じるという前提に基づいている。生が強力であればあるほど、洞察される世界、いわば存在するものたらしめられる世界は、それだけ広くなければならない。論理化、合理化、体系化は、生の用いる救助手段である。[26]

論理化、合理化、体系化のプロセスを経て、世界は持続するものとなる。ここで注目すべきは、ニーチェが「存在するものたらしめる」という表現を用いている点にある。言い換えると、存在するものは虚構されたものであると言うことができる。論理化や合理化、体系化された存在の世界は生の救助策として位置づけられている。したがって、存在位相において初めて、生の維持が可能になるのである。

ニーチェによると、実在性とは「真の世界」によって支えられたものではなく、われわれが創造し、論理化や秩序を立て、偽造した事物が構成する世界つまり仮象（Schein）の世界に他ならない。生成流転する世界においては生を維持することができないため、事物を定立せざるをえないのである。ニーチェは「遠近法的な評価と仮象性に基づくのでなければ、生というものは全く成り立たないだろう」[27]と述べているように、われわれが現に生きている世界を仮象の世界として位置づけ、まさにこれこそが真の世界なのである。しかし、これまでに形而上学批判という文脈において論じられた存在は、この生存の側面の根本が隠蔽され、形而上学的な価値定立へと歪曲された形で発展してしまうことにより、批判されている。しかし、ニーチェは存在の世界の仮象性を積極的に認めることにより、仮象の必要性を説いている。

> ヘラクレイトスは、存在とは一つの空なるフィクションであるという説を以て、永遠に正当さを保ちつづけるでしょう。「仮象」（Schein）の世界が唯一の世界なのです。「真の世界」とは単に後から追加的に持ち込まれた偽りの世界にすぎません。[28]

ここで言及されている存在とは、形而上学を前提とする批判されるべき存在である。ニーチェはヘラクレイトスに言及することにより、「真の世界」を批判し「仮象」の世界の重要性を説いている。先に述べたように、「仮象の世界」を形而上学に規定されていない存在位相として捉えることができる。ニーチェは、われわれの生を維持するために必要不可欠である仮象としての存在の世界を肯定しているのである。では、仮象の世界とはいかなるものか。ニーチェは以下のように述べる。

> 仮象の世界、すなわち価値に従って見られ、整えられ、選ばれた世界ということ。価値に従ってとは、この場合、動物界の或る特定の種属の維持と権力の増大（Macht-Steigerung）に関して有益だという観点に従って、ということである。それゆえ、遠近法的なものが、「仮象」の性格をあたえるのだ！[29]

ニーチェによると仮象の世界とは、種属の維持と権力の増大という価値に即して、整えられ選択された世界である。この仮象は権力（Macht）

の作用によって構築される。しかしここでは、仮象を構築する主体は動物界といった種族に限定されているために、権力（Macht）が用いられていることがわかる。さらにニーチェは、仮象について以下のように述べる。

> 真の世界とは一つの遠近法的仮象であり、そのそもそもの由来は（われわれが、より狭い、縮小され単純化された世界を絶えず必要としているかぎりにおいて）われわれの内部にある―われわれが、破滅することなしにどの程度まで仮象性を、つまり嘘の必然性を自分に容認することができるかということこそが、力（Kraft）の尺度であるということ。[30]

われわれの必要性に応じて構築された遠近法的仮象こそが真の世界に他ならない。ニーチェは、仮象の世界が力（Kraft）によって生み出されることを強調している。さらに、力の度合いによってこの仮象の世界を受け入れることができるのである。権力への意志の作用である価値評価は遠近法主義を前提としている。さらに、仮象と権力への意志に関し、ニーチェは以下のように述べる。

> 存在と仮象の区別は、心理的に考え直してみるなら、「存在自体」を生み出すことも、なにが「現実」かの基準を作り出すこともない。ただ、われわれが仮象にどの程度かかわっているか、その強さに応じた仮象性の度合いを測る基準を与えてくれるのみである。[31]

存在と仮象は、われわれの関心の強さによって構築される。ここで述べられている関心とは権力への意志として捉えることができる。存在や仮象は権力への意志の作用であることから、それらの世界に対し、存在自体や実在性を規定することはできない。言い換えると、ニーチェが提唱する存在とは遠近法に通底された無数の解釈から成る世界である。さらに、このような仮象の世界には生存の側面が導き出される。

> 生存の従来否定されてきた諸側面を単に必然的なものと理解するだけでなく、望ましいものと理解すること。それも単に従来肯定されてきた諸側面との関連において（たとえばその補足とか前提条件とかいう意味で）望ましいというのではなく、それ自身のゆえに、つまりそのように否定されてきた諸側面は、生存のもつ意志がいっそう明確に現れているところの、生存のより力強い、より恐ろしい、より真実の諸側面であるという意味で、望ましいものだと理解すること。[32]

生存の側面とは、生成流転する世界に対し、意味や価値、目的などを投げ入れることによって、形式化し、形態化するはたらきである。この作用が存在位相において可能になることは先に確認した。ここで注目すべきは、存在位相が生存の意志に支えられている点にある。生存の意志とはこれまでに論じた権力への意志の解釈に鑑みるに、権力への意志の保存の作用として捉えることができる。言い換えると、権力への意志によって存在位相が可能になるのである。

以上のように、存在概念の解釈について論じてきた。混沌に満ちている生成流転する世界に対し、生を維持することを目的とし、概念化や理論化することにより、存在位相は仮象として成立する。この仮象としての存在は、権力への意志の保存という観点から必要とされ、さらにこの強さの度合いによって構築されるのである。このように存在を捉えることにより、生成―形而上学的存在という二項対立を克服することができ

る。

第四節　生成と存在の関係

本節では生成と存在の関係について論じる。生成と形而上学的存在という従来の二項対立図式ではなく、生成と存在が相互に関係し合うという関係性について論じる。生成が存在を必要とするという消極的な位置づけから、生成によって肯定される存在というような積極的な位置づけ、さらに存在を含む生成というような高次の段階に移行していることを明らかにする。

まず、これまでに論じた生成と存在の解釈を踏まえつつ、両者の関係について論じる。これまでに論じたように従来のニーチェ研究においては、生成と存在は対立するものとして捉えられていた。そこでまず、生成と存在という二項対立図式で論じられているアフォリズムを取り上げることにより、ニーチェ哲学において生成が根源的であることを明らかにする。

> ヘラクレイトスの場合である。（中略）ヘラクレイトスにおける流転と破壊の肯定は、ディオニュソス的哲学における決定的要素であって、対立と闘争とを然りと肯定し、『存在』という概念をさえも退けて憚らない生成―私はこの中にこそ、何をどうであろうとも、過去に思索された考えの中で私の考えに最も親縁性を持つものがあると認めないわけにはいかないのだ。[33]

本来、意味や価値、目的を見出すことが不可能である生成する世界に対し、彼岸の世界を定立し、そこから生成の世界に価値を見出す。このような価値定立のプロセスは生成を否認することから、ニヒリズムに陥らざるをえない。ニーチェはあくまで現世の世界つまり生成の世界を根底に据えているのである。

ニーチェによると生成の世界こそが根源的なのであり、存在によって生成は否認されてはならないのである。このように、生成と存在の関係は形而上学批判の文脈で論じられていることが確認できた。このような文脈においては、存在は形而上学に通じる、批判されるべき概念として位置づけられている。

しかし、ニーチェ哲学において存在位相における価値定立が全面的に退けられているとは言い難い。存在は彼岸の価値定立に陥るのではなく、遠近法主義を根底に据えることによって、あくまで此岸に根差すものとなる。このような存在概念の解釈を前提とする限りにおいて、ニーチェは「生成に存在の性格という刻印を押すこと―これこそ最高の権力への意志なのである」[34]と述べ、生成を基盤とした存在概念に対し、一定の価値を見出していると言えよう。以下では、生成と形而上学的存在という二極的な対立図式ではなく、生成と此岸における存在の関係について論じる。

ニーチェは「持続的で究極的な単一体、原子も、単子も存在しない。ここでもまた『存在するもの』はわれわれによってはじめて置き入れられているのである（実際的で、有益で、遠近法的な根拠から）」[35]と述べている。ここでは遠近法主義によって支えられた存在概念が、生成にとって批判されるべきものではないことが明示されている。

さらに、生成において存在が認められるという位置づけから、生成が存在を必要とするという位置づけに変化している。「遠近法的な評価と仮象性に基づくのでなければ、生というものはまったく成り立たないであろう」[36]とニーチェが述べているように、生成と存在は対立するのではな

く、生成が存在を必要とすることが明示されている。生成や消滅、破壊に満ちているカオスの世界に対し、形態化、形式化することによって、世界を安定させる。これらの作用によってこそ生は保たれるのである。

しかし生成と存在の関係は、生成は存在によって安定するというような消極的な位置づけに留まるのではない。存在が生成を基盤とすることによって積極的に肯定されるのである。以下では、仮象としての存在位相を肯定する生成の一側面について論じる。

ニーチェは「『価値』という観点は、生成の内部において比較的生命が存続している複雑な構成物に関する保存と上昇の条件の観点である」[37]と述べている。ここでは、生成における権力への意志の保存や上昇の条件として価値定立が位置づけられている。言い換えると、価値を定立することによって、権力への意志の保存や上昇が可能になるのである。したがって、存在位相は権力への意志の保存と生長の条件にほかならない。存在を肯定するという生成の作用に関し、ニーチェは以下のように述べる。

> 世界を「真の」世界と「仮象の」世界とに二分することは、キリスト教の遣り方によってであれ、カントの遣り方によってであれ（カントはとどのつまり策士的なキリスト教徒ですが）、デカダンスの一つの暗示―下降する生の一つの徴候にすぎません。・・・芸術家が実在よりも仮象を尊重するからといって、この命題に対する反証とはなりますまい。なぜなら、芸術家の場合には、「仮象」なるものはいま一度実在を意味しているからです。選抜、強化、訂正を潜り抜けてではありますが・・・悲劇的芸術家は厭世主義者ではありません、―彼はいっさいの疑問とすべきことや畏怖すべきことそれ自体に向かってまさに肯定を告げる者であります。彼はディオニュソス的です。[38]

ニーチェによると、真の世界と仮象の世界という区分はなく、仮象の世界こそが真の世界として位置づけられている。選択や強化、修正を受けた仮象の世界こそが実在である。仮象としての世界を然りと断言することによって、それを肯定的に受け止め、生き抜くこと、それが「ディオニュソス的」なのである。この仮象の世界を肯定すること、ここで論じられている「彼」とはツァラトゥストラにほかならない。ニーチェは、彼自身の思想の体現者であるツァラトゥストラの姿に、仮象としての世界をディオニュソス的に肯定することを重ね合わせている。したがって、生成が形而上学批判という文脈から、存在を肯定するものとして位置づけられていることが確認された。

上述の通り、生成と存在の関係は、生成概念が形而上学的な存在を拒否するという関係から、安定化のために存在を必要とする、さらに存在を肯定するというような相互補完関係として捉えられることが明らかになった。

しかし、このように、生成と存在の関係を二項対立図式で捉えることには限界がある。なぜなら、生成が存在を肯定するという生成―存在という枠を超え出て、生成に存在の要素が見出されるからである。言い換えると、生成概念は存在を包摂することによって、さらに高次の概念となるのである。そのような生成の解釈に関し、ニーチェは以下のように述べる。

> 私のディオニュソス的理想・・・すべての有機的機能を持つ、すべての最強の生本能の光学。すなわちすべての生がもっている誤謬を意欲する力（Kraft）。思考の前提そのものである誤謬。「思考がな

> されるる以前に、すでに「捏造がなされ」てしまっていなければならない。同一の場合を得るために、等しいものという仮象性（Scheinbarkeit）をしかるべく構成するはたらきは、等しいものを認識するはたらきにもまして根源的である[39]

「生本能の光学」として論じられているのは、権力への意志を基盤とした遠近法主義にほかならない。この権力への意志による解釈は認識以前に「仮構」されたものであることが述べられている。無数の解釈によって成り立つ仮象の世界が認識や思考といった認識より根源的であることはこれまでに確認した。このような世界は存在位相において初めて可能となるのである。ここで注目すべきは、誤謬を生みだす力がディオニュソス的な理想として捉えられている点にある。第二節において論じたように、ディオニュソス的なものとは自己と世界が一体となり、陶酔や至高性を感じ、カオス的な原世界に立ち戻ることであり、生成概念と類似する重要な概念であった。

しかし、ここではディオニュソス的なものの理想として、権力への意志に基づき誤謬としての仮象が構築されることが位置づけられている。さらにニーチェは「生成を捏造（Erfinden）、意欲、自己否定、自己超克として。主体ではなく行為、設定、創造性なのだ」[40]と述べている。このように設定が創造性と並列して論じられていることから、存在を肯定するという生成の一側面が論じられていることが確認できる。ここで注目すべきは、生成概念に対し、捏造するという存在の側面が見出されている点である。したがって、従来の二項対立図式の関係では、生成と存在の関係を論じることには限界があると言えよう。生成に存在の要素が見出されることによって、二項対立図式は解消されるのである。

ニーチェが「ある種の生成自体が存在するものという錯覚（Täuschung）を作り出さ（schaffen）なければならないのである」[41]と述べているように、新たに存在を構築する作用として生成が位置づけられている。さらに、「変化、変遷、生成一般は、仮象性を証明するものと受け止めました。何かわれわれを迷わすものがそこに必ず存在する徴候だと考えて来た」[42]とニーチェは述べていることから、生成は仮象性つまり存在の証明として位置づけられているのである。

生成に存在が含まれることにより、存在位相における認識においても、生成の要素が見出される。「『価値』は本質的に、この支配的諸中心部の増大・減少に対する観点である（いずれにせよこの中心は『多数性』であって、『単一性』は生成の本性のなかにはまったく存在していない）」[43]とあり、価値は生成の本性のうちにある多数性を基盤とするのである。したがって、生成が存在を肯定するという二項対立の関係から、存在位相における価値定立に多数性という生成の要素が見出されることによって、生成と存在に重複する部分が見出されるのである。ニーチェは世界の定立作用としての解釈を論じる中で以下のように述べる。

> われわれがかかわっている世界は偽り（falsch）である。つまり事実的関係ではない。そうではなく虚構であり、乏しい観察を集めて丸味をつけただけのものである。世界は「流れて」いる。生成している（etwas Werdendes）のであり、たえず自己自身を押し流す偽りであって、決して真理に近づくことはない。―なぜなら「真理」などは存在しないのだ。[44]

偽りの世界とは、解釈によって構築されている世界にほかならない。ここで注目すべきは、生成流転するカオスの世界に対し、安定化を図るための解釈が「流れている」ものとして捉えられている点にある。生成

概念が存在位相における解釈という役割を担うことによって、解釈それ自体も生成に根差したものとなる。言い換えると、解釈が含まれている存在位相においても生成の要素が見出されていると言える。最後に、ニーチェが生成を論じるアフォリズムを取り上げる。

> 力（Kraft）として偏在し、力と、力の波の戯れとして一であると同時に「多」であり、ここで集まると思うと別のところで引いてゆき、それ自身の中で疾駆し、かつ滔々と流れる力（Kräfte）の海原であり、永遠に前進と後退をくりかえし、途方もない年月をかけて回帰し、その生み出す形態は減少するかと思えば充溢し、最も単純なものから発して最も多様なものへ、最も静かで、硬く、冷ややかなものから最も灼熱し、荒々しく、自己矛盾的なものへと進みゆき、そしてまた再び充満から単純なものへ、矛盾の戯れから喜ばしき調和へ引き戻り、自らを肯定しつつこの自らの同じ軌道と年月の中にとどまり、永遠に回帰せざるをえないものとして、いかなる飽食も、倦怠も、疲労も知らない生成として自らを祝福する―、永遠の自己創造と自己破壊のこの私のディオニュソス的世界、二重の歓喜にみちた、この秘儀としての世界、この私の善悪の彼岸（以下略）・・・[45]

力としては単一でありつつも、大小様々な力が偏在するからこそ、複雑で多数なのである。権力が入り混じるその様子は、滔々と流れる「海原」と形容され、永遠に変化するものであり、生成を象徴していると言える。しかし、それは形成しつつ、単純なものから多様なものへ、つまり存在から生成へ変容する。さらに、灼熱で、荒々しい自己矛盾する生成から、単純な存在へと帰来することによって、自己自身を生成として肯定するのである。このような肯定がディオニュソス的なのであり、「二重の歓喜」とは生成と存在の世界に他ならない。したがって、生成に存在の性質を見出すことができるのである。

上述の通り、生成と存在の関係について論じてきた。形而上学批判という文脈のもとでは、生成と存在は対立するものとして捉えられていた。しかし、生成における存在の必要性、さらには存在を肯定する生成というように、両者の関係に近接性が見出されることから、従来の二項対立図式において論じることには限界がある。さらに、生成概念において存在の要素が見出されることによって、存在を含んだ高次の生成として位置づけることができる。

注

ニーチェの著作は以下の全集を用い、訳出・引用の際には後掲の和訳を参照した。当該の箇所は、巻をローマ数字とアラビア数字で、頁をアラビア数字で示した。Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, Herg. Von Giorgio Colli und Mazzion Montibari, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1967―74. 『ニーチェ全集』白水社　1968～87年　なお引用の訳文は白水社版を用いたが、必ずしもそのままではない。また、訳文は権力への意志に統一する。

FW: *Die fröhliche Wissenschaft*
JGB: *Jenseits von Gut und Böse*
GD:*Götzen-Dämmerung*
EH:*Ecce homo*

① JGB 13
② FW 349
③ JGB259
④ Ⅶ 3,36［22］
⑤ Ⅷ 2,10［167］
⑥ Ⅷ 3,14［36］

⑦ Ⅷ 3,14［14］
⑧ Ⅷ 3,14［14］
⑨ 同上
⑩ Ⅷ 1,2［148］
⑪ Ⅷ 1,7［60］
⑫ Ⅷ 1,1［124］
⑬ Ⅷ 2,11［99］
⑭ 同上
⑮ Ⅷ 3,14［153］
⑯ Ⅷ 2,11［73］
⑰ Ⅷ 2,9［91］
⑱ Ⅷ 2,10［138］
⑲ EH 悲劇の誕生 3
⑳ FW 370
㉑ Ⅷ 1,17［54］
㉒ GD 哲学における「理性」4
㉓ GD 哲学における「理性」3
㉔ Ⅷ 2,7［54］
㉕ Ⅷ 2,9［145］
㉖ Ⅷ 2,9［91］
㉗ JGB 34
㉘ GD 哲学における「理性」2
㉙ Ⅷ 3,14［184］
㉚ Ⅷ 1,9［41］
㉛ Ⅷ 1,7［49］
㉜ Ⅷ 2,10［3］
㉝ EH 悲劇の誕生 3
㉞ Ⅷ 1,7［54］
㉟ Ⅷ 2,11［73］
㊱ JGB 34
㊲ Ⅷ 2,11［73］
㊳ GD 哲学における理性 6
㊴ Ⅷ 2,10［159］
㊵ Ⅷ 1,7［54］
㊶ Ⅷ 2,9［89］
㊷ GD 哲学における理性 5
㊸ Ⅷ 2,11［73］
㊹ Ⅷ 1,2［108］
㊺ Ⅶ 3,38［12］

（東京都中学校社会科教諭）